

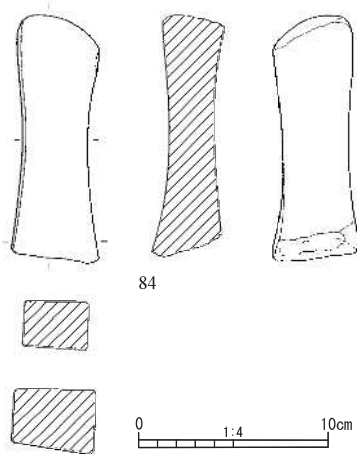


Fig.54 砥石実測図

砥石 (Fig.54) 細江町資料のなかに凝灰岩製の砥石が認められる。全長 6.6cm、最大幅 2.3cm、重量 34g であり、同形態の砥石としては小型の部類に属する。断面は方形を呈しており、長辺を構成する 4 面ともよく使い込まれ、緩やかに内側にむかって彎曲している。この面を研磨面と呼んでおく。小口にあたる端部は使用されていないが、ほぼ副葬時の形状を示しているとみられよう。研磨面には研ぎの痕跡としてしばしばみられる細かな条線が確認できない。仕上げなどの工程で用いられた砥石と考えられよう。

4 面に研磨面をもち、彎曲する形態まで使い込まれた砥石は、中期の甲冑出土古墳から頻繁に出土する。狐塚古墳の築造時期に近い類例として、大阪府鞍塚古墳、奈良県五条猫塚古墳、福岡県堤当正寺古墳、静岡県五ヶ山 B2 号墳などがある。堤当正寺古墳例は全長 22.7cm、五条猫塚古墳例は複数例があり、全長 22.0cm ～ 16.5cm、五ヶ山 B2 号墳例は全長 15.0cm、鞍塚古墳例は全長 14.1cm といずれも狐塚古墳例よりも大きい。小型の砥石は提げ砥として、小孔が穿たれたものが知られる。提げ砥の場合は、本例のような角柱状の形状ではなく、扁平な形状の素材を用いることが多い。

砥石の出土が確認できることから、狐塚古墳には工具が副葬されていた可能性が考えられる。2 点の鉄器が錆着する 78 は鉄鏝の可能性はあるが、工具と捉えても矛盾はない。

(3) 副葬品の編年的位置

狐塚古墳から出土した副葬品群について、筆者による古墳様式編年（鈴木 2014）との関係を整理しておく。長方板革綴短甲は、前胴の上段に帯金を有すること、中段と下段の地板枚数がそれぞれ 7 枚〔7、7〕の地板配置とする）であることが特徴といえる。地板配置は阪口英毅の分類（阪口 1998）による II a 式に相当する。長方板革綴短甲の前胴上段に帯金をもつ特徴は、古い時期から認められるものの、出現頻度が増すのは比較的新しい段階になってからである（阪口 1998）。〔7、7〕の地板配置の特徴とあわせ、長方板革綴短甲の製作段階のなかでは概ね中段階に相当すると考えられるだろう。類似する特徴をもつ長方板革綴短甲の副葬時期は大阪府豊中大塚古墳といった中期前葉（中 2 期）から、兵庫県小野王塚古墳のように中期中葉新段階（中 4 期）にかけてであり、比較的長期間におよぶ。

鉄鏝は鳥舌鏝と推定できる資料（77）が知られる。鳥舌鏝の存続時期は中 1 期から中 4 期までに中心があり、甲冑の編年的位置とも矛盾はない。明確な位置づけが困難な 78 については、確定的な評価を下すことが難しい。78 は比較的細身のつくりであり、仮に鉄鏝だと考えると、その編年的位置は中 3 期以降に位置づけるのが妥当であろう。

刀剣については、碎片化が顕著であり、個体の特徴から編年的位置を導き出すことが難しい。ただし、鉄刀および鉄剣の双方が認められることは注目してよい。刀剣の比率にかんしては、中期を通じて剣（槍先を含む）から刀を中心とする組成に変化することが知られている。両者が認められる狐塚古墳の組成は、中期中葉（中 3 期～中 4 期）を中心としたものであることを示している。

以上の特徴から総合的に判断して、狐塚古墳における副葬品の編年的位置は、中期前葉（中 2 期）から中期中葉新段階（中 4 期）にあると結論づけられる。副葬品における評価に加え、後述するように埴輪の検討をふまえれば、狐塚古墳の築造時期はさらに絞り込むことができる。

第4章 後 論

1 狐塚古墳の埴輪と製作集団

(1) はじめに

2011年に実施した発掘調査と月岡資料、細江町資料、1975年出土資料の検討によって、狐塚古墳にかかわる情報が明確になった。この調査成果を受けて、まずは出土品の主体を占める埴輪に注目し、その編年的位置と想定できる埴輪生産体制について検討を加える。

(2) 狐塚古墳埴輪群の編年的位置

狐塚古墳の円筒埴輪は大きく、2次調整にヨコハケを施すⅠ群と、2次調整にタテハケのみを施すⅡ群に分けられる。両者は調整技法のみならず、口縁や突帯の形状、透孔の特長、器壁の厚さなどの違いも看取でき、それぞれ製作主体が異なると考えられる。

狐塚古墳に樹立された埴輪の時期と特徴をうかがうために、近畿地方中枢部の埴輪との直接的な比較が可能なⅠ群の円筒埴輪と形象埴輪の諸特徴を整理する。

円筒埴輪の特徴 編年的位置づけをうかがう上で着目すべきⅠ群円筒埴輪の諸特徴を示しておく。

焼成技法については、表面には黒斑が認められないことから、窖窯焼成で製作されていることが判明する。色調は黄褐色（にぶい橙色、浅黄橙色）を主体としており、須恵器のような硬質で灰色に焼きあがるものは知られていない。透孔はごく僅かに方形のものが含まれるものの、円形が主体である。外面調整はヨコハケを主体とし、B種ヨコハケ技法（川西 1978）が看取できる個体がある。B種ヨコハケ技法をさらに詳細に観察すると、調整は突帯の間を複数回重複させるものが主体であり、一度で巡らせるものが僅かにみられる。それぞれ静止痕は直立気味である。B種ヨコハケ技法の細分では、前者はBb種ヨコハケに、後者はBc種ヨコハケ（一瀬 1988）に相当する。突帯間隔が判明する資料がないが、破片資料の検討から12～13cm程度であったとみられる。基底部高は16cm程度であり、突帯間隔と比べてやや高い傾向がある。基底部にはヨコハケが用いられず、1次調整のタテナデのままにされる個体が多い。

円筒埴輪の編年的位置 これらの諸特徴を示す円筒埴輪は、川西宏幸による円筒埴輪編年（川西 1978）のⅣ期に

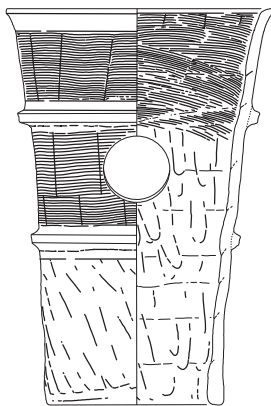
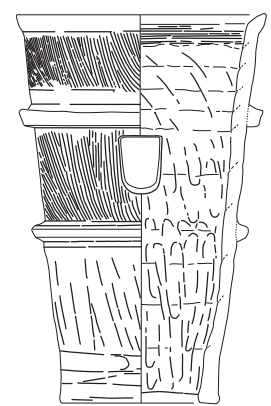
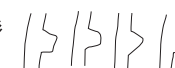
	Ⅰ 群	Ⅱ 群
全 体 形		
調整	ヨコハケ（B種ヨコハケ含む）	タテハケ
透孔	円形（僅かに方形）	半円形
口縁	屈曲 明瞭 	屈曲 不明瞭 
突帯	台形 	不整形台 三角形 
器壁	薄い	厚い
底径	大きい	小さい
配置	中段北側・東側平坦面	中段東側平坦面
比率	66%（口縁：33点）～72%（実測全点：57点）	34%（口縁：17点）～28%（実測全点：22点）

Fig.55 円筒埴輪群別模式図

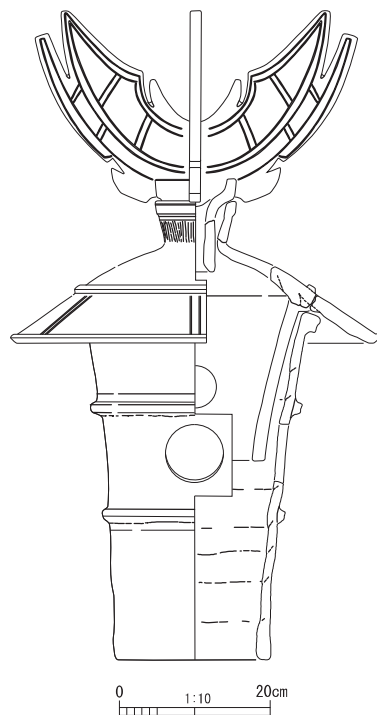


Fig.56 蓋形埴輪復元模式図

相当する。埴輪検討会編年（埴輪検討会 2003a・b）に照らしあわせると、突帯間隔や基底部高などに古相の様相が認められるが、焼成技法とB種ヨコハケ技法の特徴から判断して、IV期1段階に位置づけることができるだろう。近畿の指標的な古墳との並行関係を示せば、大阪府堂山1号墳、大阪府七観古墳、大阪府誉田御廟山古墳（伝応神天皇陵古墳）、大阪府アリ山古墳などの埴輪が、ほぼ同段階にあたると捉えられる。

形象埴輪の特徴 形象埴輪の特徴と編年的位置についても検討しておこう。形象埴輪も黒斑が全く認められないことから、窖窯焼成と判断できる。以下、種別ごとに検討を加えておく。

家形埴輪は、屋根に網代表現がみられるものが含まれ、軸部の壁には開口部が遺存する。板造りにした基底部をもち、開口部には下部に半円形の抉りを加えるものがある。半円形の抉りを加えた開口部をもつ家形埴輪は入口を表現したものとみられ、畿内中枢部の古墳において類例が知られる。東海地方における類例は少ないが、三重県宝塚古墳などの大型前方後円墳から出土した家形埴輪に同様の表現が認められる。

蓋形埴輪については、立飾りの上端が内側に傾き彎曲する形態が特徴的である。立飾り上端の形状は比較的新しい様相を示

すが、立飾り一枚に対する鰭飾りは外側2箇所と内側1箇所という古相の特徴もあわせもつ。立飾り内の模様には、2本の平行線を用いた区画がみられる。立飾りには方形の透孔（検討会編年IV期2段階に出現）がみられないことも留意すべきである。

蓋形埴輪については、貼付突帯口縁をもつ円筒埴輪（Fig.29）との関係に注目したい。貼付突帯口縁の円筒埴輪は直径30cm以上のものが多く、普通円筒埴輪と比べ大振りのものが多く占める。また、口縁端部を厚くする形状は、蓋形埴輪の軸受け部の形状と共通し、上部に別部材を組み合わせることを意識した造形の可能性がある。出土位置についても墳丘中段平坦面か上段斜面上から出土するものが多く、本来は墳頂平坦面に樹立されていたものである可能性が大きい。以上の特長から想定すると、貼付突帯口縁をもつ円筒埴輪は蓋形埴輪と組み合う基底の部材である可能性が高いとみられよう（Fig.56）。

甲冑形埴輪は粘土の添付によって綴じ革を表現したもので、埋葬施設から出土した実物と同じ技術段階の革綴短甲を模している。草摺の山形模様は大振りの工具を用いた刺突文で表現されている。同じ工具をもちいた表現は冑の鋳にもみられる。刺突文による草摺の模様表現は、近畿地方中枢部における甲冑形埴輪と共通するもので、狐塚古墳の形象埴輪製作者が近畿地方と強いかわりをもっていたことを示唆している。

この他、靱形、盾形、推定鳥形などの形象埴輪があるが、いずれも同時期の製作と位置づけて問題ない。形象埴輪の編年的位置も、円筒埴輪I群における評価と同様、埴輪検討会編年のIV期1段階と捉えて矛盾がないといえるだろう。

狐塚古墳の築造時期 以上の検討をとおして導き出した埴輪の編年的位置は、狐塚古墳の築造時期を示すものといえる。埴輪検討会編年IV期1段階は、須恵器編年（田辺 1981）におけるTK73型式期に並行する。この時期は、金工技術史の中では、甲冑における鋳留技法の導入期にあたり、初期の鋳留甲冑や、金銅技法をもちいた製品が生産され始める時期と評価しうる（鈴木 2014）。後述するように、長方板革綴短甲や鉄鏃など部分的に知られる副葬品の編年的位置についても整合的に

理解できるだろう。埴輪と副葬品を総合的に捉える古墳の様式編年においては、和田晴吾による編年（和田 1988）の七期に、前方後円墳集成編年（広瀬 1991）の 6 期に相当し、筆者（鈴木 2014、Fig.59）による中期古墳編年の中 3 期に該当する。暦年代の対応関係は、未だ不確実な要素があるが、おおむね 5 世紀の第 1 四半期を中心とする頃と捉えられる。

（3）埴輪工人の構成

円筒埴輪の群別 狐塚古墳の円筒埴輪は、大きくヨコハケを施すⅠ群とタテハケを施すⅡ群に分けられる。両者における焼成や色調、胎土などの差異は顕著といえないが、形態的特長や製作技法上の違いは明確であり、異なる工人集団によってそれぞれの埴輪群が製作されたものと捉えられる。その諸特徴は Fig.55 のように整理できる。

近畿地方的な製作技法をもち、形態的な規範が遵守されているのはⅠ群の円筒埴輪である。いっぽう、Ⅱ群とした円筒埴輪は、口縁の稜線が曖昧であること、形態の弛緩が顕著な突帯をもつこと、半円形もしくは楕円形の透孔がみられること、2 次調整にタテハケを用いること、器壁が厚く不均一であること、Ⅰ群と比べ底部径が小さいこと、などの諸特徴が認められる。円筒埴輪の製作に不慣れな在地で編成された工人の手によるものと考えられる。Ⅰ群とⅡ群の比率は、現状の資料数で判断する限り、2 対 1 もしくは 3 対 1 程度である。墳丘中段平坦面における両者のあり方は、北側埴輪列についてはⅠ群のみ、東側埴輪列についてはⅠ群とⅡ群が混在する、といった違いがある。

製作技法上、個性的な様相が強いⅡ群の円筒埴輪であるが、Ⅰ群の円筒埴輪との関連も多く認められる。具体的には、焼成・色調・胎土がⅠ群と共通すること、全体形が 2 条 3 段構成とみられること、口縁内面にⅠ群を模したような稜線を意識したもの（58、61、63、67 など）がみられること、基底部にハケ調整が施されずナデ調整のみであること、などがあげられよう。これらのことから、Ⅱ群の円筒埴輪は独立した環境下で製作されたものではなく、Ⅰ群の円筒埴輪を模倣して、円筒埴輪製作に不慣れな工人たちが製作したものであるという評価を下すことが可能である。Ⅱ群の円筒埴輪の製作にあたっては、Ⅰ群の埴輪を製作した工人たちの指導を受けていた可能性が高いとみてよいだろう。

埴輪製作工人の実態 狐塚古墳にみられる形象埴輪の精良な製作技法や施文技法をみると、埴輪づくりに精通していた製作者の手によるものと判断できる。形象埴輪には形態や技法の規範から外れた破片がみられないことから判断すると、狐塚古墳に樹立された形象埴輪は、埴輪製作の熟練者のみによってつくられたものと評価できるだろう。蓋形埴輪の基部の可能性がある貼付突帯口縁円筒埴輪をもつ円筒埴輪がⅠ群の技法をもつことを介在させると、形象埴輪の製作工人は、大きくⅠ群円筒埴輪を製作した工人集団に含めて捉えてよいことが分かる。狐塚古墳におけるⅠ群の埴輪製作工人は、形象埴輪を専門的に製作しつつ、円筒埴輪についても在地の工人を指導しながら、朝顔形埴輪のほぼすべてと、普通円筒埴輪の 4 分の 3 程度を製作していたことがうかがえる。いっぽう、Ⅱ群の埴輪製作工人は形象埴輪や朝顔形埴輪の製作には関与せず、Ⅰ群埴輪製作工人の指導のもと、もっぱら普通円筒埴輪のみを製作していたと捉えられる。

埴輪の受容 狐塚古墳が築かれた浜名湖北岸地域（都田川流域）には、先行する埴輪樹立古墳がみられ

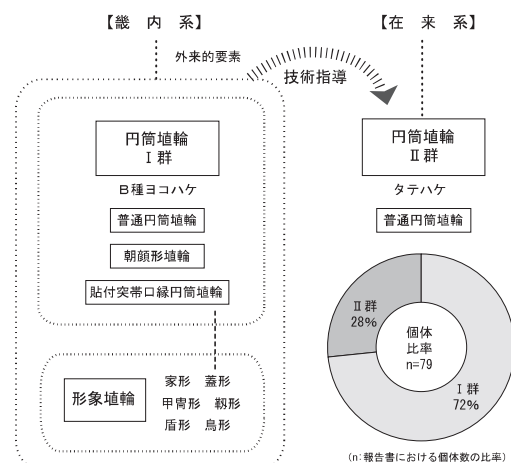


Fig.57 狐塚古墳埴輪製作工人の構成

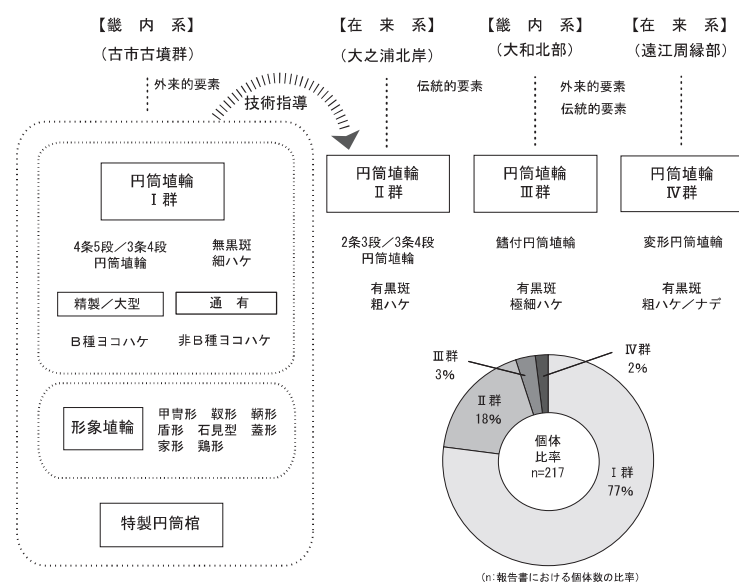


Fig.58 堂山古墳埴輪製作工人の構成

が認められる。狐塚古墳の円筒埴輪は、基底部が高く2次調整のハケメがみられないことが特筆される。こうした形態的、技法の特徴は磐田原台地南部地域の埴輪には看取できない。また、B種ヨコハケが高確率で確認できることも注目してよいだろう。狐塚古墳と同時期に築造された盟主的前方後円墳である堂山古墳においても、B種ヨコハケの出現率は極めて少ないことを考えると、その違いは大きい。さらに、形象埴輪においても、狐塚古墳出土例にみられる諸特徴には同時期の堂山古墳やその陪冢的性格が強い堂山古墳群の事例と積極的な関連性を認めたい。

I 群円筒埴輪の故地 以上のことから判断すると、狐塚古墳 I 群埴輪の直接的な関連地は、遠江における先進地ではなく、より直接的に近畿地方中枢部に求める方が妥当であろう。先述のとおり、狐塚古墳の円筒埴輪は基底部が高く、2次調整のヨコハケを施さず1次調整のナデのままで仕上げられることが、注目すべき特徴である。B種ヨコハケの出現率が比較的高いことも近畿地方との強い関連を想定させる。また、円筒埴輪のみならず、形象埴輪における技法や形態的な諸特徴も合わせて考慮すべきである。

現状では、こうした特長をもつ狐塚古墳の I 群円筒埴輪と形象埴輪の故地は、古市・百舌鳥古墳群の中に求めておきたいが、近畿地方中枢における別の候補地も想定しうる。今後、埴輪群の細差に注目して、I 群円筒埴輪製作工人の起源地を詳細に探る必要があるだろう。

中期前半の埴輪生産体制 一つの古墳に樹立された埴輪において、指導的な役割を担った畿内的な一群 (I 群) と技術指導を受けて製作されたと考えられる在来的な一群 (II 群) が混在する状況は、中期前半を中心に数多く認められる。出土埴輪の総合的な分析から埴輪製作工人編成の解明に成功した近隣地の事例として堂山古墳 (原編 1995、鈴木 2008) と岐阜県昼飯大塚古墳 (中井ほか 2003) をあげておく。

堂山古墳の円筒埴輪については、大きく畿内的要素が強い I 群と在来的な要素が強い II 群に分けられる。両者間で、大きさ、焼成技法、ハケメ原体が異なり、両者の違いは狐塚古墳の事例よりも鮮明である。その埴輪製作工人の構成を概念的に示すと、I 群円筒埴輪工人の技術指導を受け II 群円筒埴輪が製作されているとみられること、I 群円筒埴輪と形象埴輪の製作者が同一の工人集団と解釈しうることなど、狐塚古墳にみられる埴輪工人集団の構成と近い内容が看取できる (Fig.58)。昼飯大塚古墳の埴輪についても、群別の細差はあるが、近似した製作工人の構成が復元できる。

ない。狐塚古墳が築造される以前の当地には、埴輪生産にかかわる技術的な伝統がないといえるだろう。こうした埴輪未受容地において、新たに埴輪を採用するためには、先進地域からの技術提供が必要である。ここにいう先進地については、近畿地方などの遠隔地とともに、松林山古墳が構築された磐田原台地南部地域など、地域内における近隣地もその候補になりうるか検討すべきである。

しかしながら、狐塚古墳の円筒埴輪には、同時代もしくは先行する磐田原台地南部地域の埴輪にはみられない製作技法や形態の特徴